「霊が降る」
使徒言行録 2 章 1－11 節

五旬祭はもともと小麦の収穫を祝う祭りでしたが、次第にシナイ山において律法が授与された日と考えられるようになっていきました。そして、十戒が与えられて神の民イスラエルが誕生したように、新しい神の民であるキリストの教会は聖霊が注がれることによって誕生しました。ペンテコステはそのことを示しています。

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした」(1－4)。

ここに「突然」という言葉が使われています。それは、人間が計画したことではないということです。それに続いて、「激しい風が吹いて来るような音」が聞こえた、「炎のような舌が分かれ分かれに」現れたとあります。風にしても、炎にしても、旧約以来の神様の臨在を示す象徴です。ですから、ここで告げられていることは、そのようにしてしか表現し得ない、神様による御業としか言いようのない出来事が、弟子達の上に起きたということです。

つまり、この出来事のすべては神の側から到来したのです。人間が教会を生み出したのではない。教会は、誰か強力な指導力を持つ人物が現れて弟子たちをとりまとめて作ったのではないのです。ここに記されている風も、炎も、舌もこの世界から出たのではなく、神からのものです。この風はこの世の思想の風ではないし、この炎は人間が煽って燃え上がる熱狂や情熱でもないし、この舌は人々を納得させる人間の巧みな言葉でもありません。そんなものとは関係なく教会は誕生したのです。

弟子たちは「一つになって集まって」祈っていました。復活の主イエスがしてくださった「聖霊が注がれる」という約束を信じて。この世界からではなく、天からの出来事をひたすらに待ち望んだのです。そこに神の出来事が起こったのです。

「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした」。

神様はそこにいた一同を聖霊で満たされました。何のためでしょうか。もちろん、弟子たちを用いるためです。そして、あらゆる国々、あらゆる言語を持つすべての民族に、救いを実現するためです。その意味で、「“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした」という出来事は、極めて象徴的な出来事だったと言えるでしょう。神さまはこの世界の救いのために彼らを用いようとしておられたのです。

でも、この世界を救うのならば、人間の手に託すよりも、神様が直接なさった方がより確実で良いのではないでしょうか。それこそ激しい風が吹いて来るような仕方や、炎のような舌が現れるような仕方で、完全な超越的方法で天から直接人々を救ったら良いようにも思えます。

ところが、どうも神様は、そのようなことは望んではおられないようなのです。あくまでも神様は、人間を用いて人間を救おうとしておられるのです。激しい風が吹いて来るような音が天から響いたのは最初だけです。炎のような舌によって言葉が与えられたのもこの時一回限りです。それ以降は、人を聖霊に満たし、人を用いて、人を通して神様は救いの御業を進めてこられたのです。そして、そのような人間を通して働かれる神の御業の中に私たちは集められたのです。ならば、今度は私たちの番ではないでしょうか。

私たちも、聖霊に満たされることを求めたいと思います。あの弟子たちが「心を合わせて熱心に祈っていた」ように、ひたすら祈り求めたいと思います。私たちが聖霊に満たされ、聖霊に支配されて生きることは、私たち自身のためだけではありません。神さまのためであり、私たちの家族のためであり、友人のためであり、さらに言えば、この世界の救いのためなのです。

ペンテコステの赤い色は、神の熱情です。神さまが私たちを用いて人を救おうとしておられる。その神さまの思いに私たちも応える者でありたいと願います。